沼津市
明治史料館通信

1991.7.25（季刊 年4回発行）Vol.7 No.2 通巻第26号

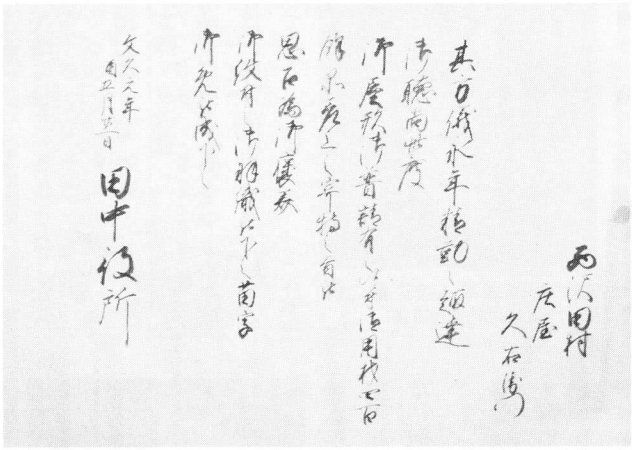
ぬまづ近代史点描⑯

百姓・町人も武士になれた

江戸時代の社会は、士農工商という身分制度に縛られた、差別を基礎にした秩序で成り立っていた。支配階級たる武士と、被支配階級たる百姓や町人との間には、厳格な上下の区別があり、身分間の移動は禁止された。

しかし、右に述べたような事柄は前提となるべき大原則であるが、実際は武家と農家・商家が姻戚関係を結んだり、百姓・町人が士分に取り立てられたりといったことも行われた。農民出身の二宮尊徳が小田原藩士になったという事実、勝海舟や榎本武揚も数代前までさかのぼれば武家の血筋ではなかったという事実などは、よく知られた事例であろう。

また、正式に身分が変わるわけではないが、領主に財政的援助を行ったり（献金などをする）、特別な功労があった、御用達をつとめる豪商や名主をつとめる豪農などは、苗字帯刀を許され、武士に準ずる資格を与えられる場合があった。



西沢田村庄屋久右衛門の苗字使用許可状

西沢田村
庄屋
久右衛門

其方儀永年精勤之趣達
御聴尚此度
御屋形御普請有之候ニ付御用材四百
余品差上之寄特之旨被
思召為御褒美
御紋付之御羽織被下之苗字
御免被成下之

文久元年
酉五月廿一日　田中役所

ここに掲げた写真は、駿河国駿東郡西沢田村の庄屋（芹沢）久右衛門が、文久元年（一八六一）、田中城の御殿修復用に四百余本の木材を献上したことに対し、田中藩（本多氏・四万石）の役所より、紋付・羽織の下賜と苗字の使用許可を申し渡した文書である。

苗字帯刀を許すということは、被支配者層内部にも差別化を施すことにより、民衆を分断支配しようという為政者の意図に基づくものであったといえよう。

さて、以下に紹介する人物や家は、百姓・町人でありながら武士になってしまったという、沼津関係のささやかな事例である。いずれも豪商・豪農層からの転身であるが、ガチガチに固定していたかに見える江戸時代の身分制度の中にも、以外な抜け穴があったという身近

な例証である。もっとも、身分的に上昇するということは、支配者側に付くということであり、決して被支配者側の立場には立てなかったのであるから、これをもって江戸時代をバラ色に描くことはできないが、身分間の相互交流が社会に流動性を持たせ、一種の安全弁になり、ある意味で近代社会を用意したことは事実であろう。では、その安全弁になった人々を以下に紹介してみよう。

沼津藩士・小野家

駿東郡柳沢村に、甲州武田氏の家臣曽根下野守の子孫と称する小野家という旧家があった。豪農として家産をつくり、村の名主をつとめた。八代目当主の小野順蔵房敷（條輔、一七四二～一八一二）は、名主在職中の安永五年（一七七六）凶作に際し、領主旗本内藤氏の許可なく官庫を開き米穀を村民に与えたため、罰せられ、村を退転し沼津に移住した。そして、沼津藩成立の翌年、安永七年足軽に召し抱えられ、以後代官や内浦魚猟運上掛などを歴任した。彼は農民出身であっただけに、地方巧者（民政に長じた官吏）だったらしい。その子房貞、孫房精は藩の剣術師範になっている。

沼津藩士小野房精（左）
（『小野兼基自叙伝』より）

原宿本陣・渡辺家

東海道原宿の本陣をつとめた渡辺家は、阿野全成の子孫と称する旧家である。寛政九年（一七九七）に幕府が愛鷹牧を設置すると、その牧士にも任命され、苗字帯刀を許された。それ以外に同家の歴代の人々は、富士郡に領地を持つ旗本の用人に抜擢され、領主財政の建て直しに働いた。渡辺素平元隆（一七五五～一八一六）は、旗本戸田家に仕え、星野曽平治と改名、富士郡中里村の陣屋に在勤した。渡辺平左衛門元豊（一七九三～一八六八）は、本陣・問屋・名主・牧士をつとめた後隠居し、旗本杉浦勘解由の用役となり富士郡柳島村の陣屋に勤務した。その子健之輔元英（一八三〇～九五）も杉浦家に仕え、柳島村に別家した。妻は沼津藩重臣水野助左衛門の娘だった。

旗本杉浦家用人渡辺健之輔
（渡辺勝子氏寄贈）

幕臣・高藤三郎

伊豆国君沢郡戸田村の名主をつとめた勝呂家は、後北条氏配下の伊豆十三将の一人勝呂淡路守の後裔という旧家。同家の当主弥三兵衛敬忠（俳号野馬堂午節）の七男に生まれた高藤三郎（一八二八～一九〇九、忠典）は、幕臣となり立身した。最初嘉永二年（一八四九）駿府町奉行三好大膳に仕え、安政二年（一八五五）に江戸の御徒士高家に養子に入ったのである。彼は、御徒士目付や神奈川奉行支配調役などをつとめ、維新後は沼津に移住し、静岡藩の軍事俗務方頭取になり沼津兵学校の管理部門を担当し、のち上京して大蔵省に出仕した。

幕臣　高藤三郎
（勝呂安氏所蔵）

幕府御林守・鈴木家

伊豆国田方郡山木村（現韮山町）の鈴木家は、南北朝期に紀州から来住したといわれ、後北条氏にも仕えた土豪の子孫。幕末期の当主重之は、村の名主や郷宿をつとめたほか、駿東郡にあった幕府山林の御林守にも任命され、陸軍方御用手伝として韮山反射炉の仕事にも従事した。維新後は、静岡藩士に列せられ、沼津城下に移住した。孫二人は沼津兵学校附属小学校に入学している。

幕府御林守鈴木重之
（鈴木敏弘氏所蔵）

シリーズ 沼津兵学校とその人材 ㉕

沼津兵学校生徒の年齢

「徳川家兵学校掟書」の規定によると、入学が許可される生徒の年齢制限は、十四歳から十八歳までとされていた。しかし設立当初は、三十歳以下の旧幕府陸軍関係者三百余名を選抜して、予備科に編入し、明治二年秋までに四回の入学試験を実施、一挙に百十余名の合格者を資業生として採用するという、暫定的な方法がとられたため、規定通りにはならず、生徒の年齢はバラバラになった。十代の少年から、三十代の妻子持ちまでいて、中には真野肇・文二父子のように、父が兵学校の生徒、息子が附属小学校の生徒というような事例もあった。左の表は、判明した範囲での生徒の年齢である。

明治４年時点の沼津兵学校生徒年齢

第１期資業生		山口　信邦	29歳	天野富太郎	15歳
佐々木慎四郎	23歳	愛知　信元	27歳	松原　秀成	17歳
西尾　政典	20歳	飯野　忠一	35歳	第７期資業生	
芳賀　可伝	17歳	原　胤列	26歳	向山　慎吉	18歳
第２期資業生		土屋　氏貴	35歳	辻　芳太郎	18歳
永峰　秀樹	23歳	関　近義	27歳	渡瀬　昌邦	19歳
荒川　重平	20歳	倉林　五郎	30歳	宮川　保全	19歳
中川　将行	23歳	岡　敬孝	26歳	成瀬　隆蔵	16歳
成沢　知行	24歳	西村　正立	28歳	松山　温徳	19歳
真野　肇	31歳	瀬名　義利	19歳	間宮　信勝	17歳
溝口　善補	22歳	志村　貞鋹	22歳	杉浦岩次郎	16歳
第３期資業生		塚原　靖	23歳	武藤　孝長	23歳
望月　二郎	20歳	第５期資業生		第８期資業生	
古川　宣誉	22歳	中島　静	24歳	細井　勝文	14歳
矢吹　秀一	23歳	奈佐　栄	19歳	第９期資業生	
鈴木　知信	27歳	清野　勉	18歳	永峰　源吉	15歳
千種　顕信	31歳	第６期資業生		新家　孝正	14歳
原田　信民	29歳	村田　惇	17歳	その他員外生など	
第４期資業生		田口　卯吉	16歳	大森　俊次	13歳
島田　三郎	19歳	中川　喜重	17歳	長島　弘裕	22歳
石橋　絢彦	19歳	加藤　泰久	17歳	永峰　謙光	14歳
吹田　鯛六	21歳	横地　重直	23歳	斎藤修一郎	16歳
神津道太郎	25歳	竹内　有好	17歳	渡辺　素餐	26歳
佐久間信英	31歳	末吉　択郎	18歳		

江原素六とその周辺〈14〉

江原素六と森山信規

江原素六が設立・経営に尽力した私立駿東高等女学校（現県立沼津西高等学校）の初代校長に就任した森山信規という人物は、変った経歴の持ち主だった。

新潟県の士族出身で、高田中学校卒、東京築地一致英和学校中退、アメリカ・ボルクリー大学中退、星亨法律事務所就職、というのが明治三十四年（一九〇一）四月に駿東高女校長に就任するまでの彼の主な経歴である。江原と星亨との政界での親交が、森山を沼津に紹介させたのかもしれない。

森山は、三十六年六月一旦離任したが、四十一年十月には第四代として再び校長に就任した。しかし協議員（学校経営に参画した駿東郡の町村長）らの排斥にあい、大正二年（一九一三）十二月辞職に追い込まれた。この一件は謎に包まれているが、あくまで私学として自由な教育を目指した江原・森山らと、郡立への移管を考えていた協議員たちとの間に対立があったのではないかと想像される。

森山には、『新旧社会主義』（明治二十七年刊）・『米西戦争』（三十六年刊）などの訳著書があるが、前書は社会主義思想を日本に紹介した極く早い時期の翻訳書だった。

〈参考〉『高女・西高九十年史』

森山信規

森山信規著『新旧社会主義』『米西戦争』

お知らせ欄

◎企画展「愛鷹牧」がはじまります

期間：7月20日(土)～9月29日(日)
会場：4階展示室
趣旨：愛鷹牧とは、寛政九年（一七九七）に江戸幕府が開設し、明治初年に廃止されるまで続いた馬の牧場です。房総地方の牧とともに数少ない幕府直轄の牧でした。古代以来愛鷹山に棲息していた野生の馬を、牧の範囲を定めて管理し、年に一回ずつ捕獲し、一部を幕府が使用したほかは、地元に農耕用・運搬用として払い下げました。今回の展示会では、愛鷹牧を通して人と馬の関係の歴史を紹介します。
内容：愛鷹牧関係の古文書、道具、絵図、牧を描いた絵画、牧士（牧場を管理した地元責任者）の衣装、馬具、捕込（馬を追い込んで捕えるための四角い土手）の模型などを展示します。

愛鷹牧での捕馬のようす

◎歴史講座と史跡見学会の参加者を募集します

企画展に関連して、歴史講座と史跡見学会を行います。参加希望者は当館までお電話で申し込み下さい。日程・内容は左の通りです。

8月4日(日)：大谷貞夫氏（国学院大学教授）
「江戸幕府の畜産政策と愛鷹牧」
8月11日(日)：原　秀三郎氏（静岡大学教授）
「古代の牧と駿河国」
8月18日(日)：友野　博氏（沼津市文化財保護審議会会長）
「愛鷹牧の成立と展開」
8月20日(火)：愛鷹牧の史跡見学会
（説明　文化財センター主任学芸員鈴木裕篤）

※講座の時間はいずれも14：00～16：00　定員100名　於当館講座室
※史跡見学会は9：00　明治史料館集合　定員30名　12：00まで

◎近世沼津の彫刻師・舟仙の作品の複製を受贈しました

文政年間に沼津に移り住み、嘉永六年（一八五三）に没した舟仙（しゅうせん）という彫刻師がいました。彼は、沼津藩主水野氏からも馬の彫刻を依頼された腕の持ち主でしたが、大酒飲みで、奇行の人でもありました。その作品で現存するものは極く僅かに過ぎませんが、今回桃沢神社より当館に寄贈されたのは同社に伝来した舟仙の作品のアルミ複製品です。神馬（雌雄一対）、菅原道真像、恵比須・大黒天、馬上の神官像などです。この内、神馬は、桃沢神社（愛鷹明神）が源頼朝から九十九頭の馬を奉納されたという由緒に基づき信仰の対象とされてきた、愛鷹山の野馬を彫ったもので、企画展「愛鷹牧」でも展示します。

沼津市明治史料館通信　第26号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂372－1
☎〇五五九(23)三三三五